

# OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students



## プロフィール (Profile)

氏名 (Name) 奥本陽子  
所属 (School) 人間社会学研究科  
学年 (Grade) 博士課程 3年

留学先 (Name of overseas institution)  
Southern Oregon University  
留学期間 (study abroad period)  
2017年9月13日~21日

記入日 (Date) 9月22日

## 留学レポート Study Abroad Report

今回、2nd International Holistic Teaching and Learning conferenceに参加するため、アメリカ合衆国オレゴン州アッシュランドにある Southern Oregon University (南オレゴン大学)を訪れました。会議では14日にレセプション、15、16日、17日午前中にパネルディスカッション、発表、ワークショップに参加し、会議終了後サンフランシスコで、研究テーマであるシュタイナーの思想を取り入れた学校を訪問しました。初めに南オレゴン大学について、次に発表やパネルディスカッション、ワークショップについて、最後に訪問した2つの学校について報告をします。

### Southern Oregon University (南オレゴン大学)

南オレゴン大学はリベラル・アーツ・カレッジの1つで、学生数は6200名ほど、空港から30分くらい離れたアッシュランドという文化と芸術にあふれた小さな町にあります。私が訪れた時期はちょうどシェイクスピア祭りの時期にあたり、3時間に及ぶ「ジュリアス・シーザー」や「お気に召すまま」といったシェイクスピア劇の他、夜には野外で行われる無料のコンサートやミュージカルを楽しめました。緑に囲まれた美しいキャンパスでは鹿やリスが駆け回るのどかさで、落ち着いて学業に取り組める環境にあります。教育学部では、ホリスティック教育の研究センターを創設する準備が進められているとのことで、実現すればうれしいところです。

### 2nd International Holistic Teaching and Learning conference (発表・ワークショップ・パネルディスカッション)

この会議が南オレゴン大学で行われるのは2回目ですが、ホリスティック教育の創始者である Jack Miller 教授のもとカナダのトロント大学で長く行われてきた会議を引き継いだものです。ホリスティック教育に関わる大学関係者や教師だけではなく、実際にそのような教育を受けている高校生数人も発表に参加するなど、理論はもちろん、実践に満ちた発表が相次ぎ、活気ある会議になりました。ホリスティック教育は、現代の教育で失われがちな関係性や創造性、スピリチュアリティ、共感や本質的な気づきなど人間がその全体性として人間であるために大切なものを様々な形で教育に取り戻そうとする試みです。毎朝行われた5人のパネリスト(写真中央 Miller 教授、左よりアメリカ、タイ、オランダの学者)によるディスカッションでは、ユーモアや個人的な体験も交えつつ、ホリスティック教育の意義や課題について討論が行われました。米国の国内情勢、世界情勢の影響もあってか、しばしば shadow という言葉と共に現わされた人間の負の感情、恐れや憎しみ、対立をいかに包含しつつ、その理念を実践していけるかということについて、フロアからの意見表明を含めて真剣な討議がありました。

さて、発表はラウンドテーブル形式と体験・ワークショップ形式のものと二つありましたが、私はラウンドテーブルを選びました。大きな部屋で10人くらいの発表者がそれぞれの円卓に座り、1時間の枠の中で自分のテーマについて発表をし、テーブルに来てくれた人の質疑応答に答えます。参加者は関心のあるテーマを選び、一度席に着いたら基本的には動きません。PCを使った通常の発表とは異なり、全員で同じ資料を見つめることがないのがやりにくいですが、発表の後は内容についてのオープンなディスカッションができます。私のテーブルにはシュタイナー教育の実践者がたくさん来てくれたので、理論的な発表内容を現実の問題として捉え、活発に質問、発言してくれました。

幸い、発表が一日目におわったので、それ以降は数ある発表のどれを聞きに行くのか迷いつつ、リラック  
スして参加することができました。身体が二つあればと思うことも多々ありましたが、どこに参加するか  
は基本的に研究テーマと関係するものと仕事にいかせそうなものを選びました。学習に方向性や流れをも  
たらずコア・リフレクションや子どもの死生観、ワールドカフェ方式での討論、マインドフルネスの取り  
組みなど様々な発表やワークの中で、一番心に沁みたのが虐待や差別などを経て学校を転々とした少女た  
ちを受け入れる学校からやってきた生徒が先生の質問に答えつつ自分たちの体験を語るもので、教師への  
真摯なメッセージは彼らの成長と困難の克服を感じさせました。

### 学校訪問

14日には、空港のあるメドフォード近辺の公立のシュタイナー系学校を、会議後には主催者の1人Greene  
教授に勧められたサンフランシスコにある同じく公立のシュタイナー系学校を訪問しました。いずれも教  
師やコミュニティの人々が集まって、特定の目標を掲げ認可されたチャータースクールで、学費は基本的  
に無料です。

メドフォードの学校は創立 10 年、1-8 年生までの子どもたちが通っています。公的支援を受けつつも、  
40%の家庭が経済的に困難な状態にあり、資金繰りは厳しく、教師の給料を満身に払える状態ではないな  
がら、建物を数年前に買い取り、少しずつ手仕事の道具や楽器などシュタイナー教育に欠かせないものを  
揃え、落ち着いて学校作りを進めています。学校は州の一斉テストで高水準を保ち、高校に進学した卒業  
生も芸術を通じた学びと人間関係の深さを恋しがるなど評判もよいそうです。この学校の課題は公的援助  
を受けているために州が決めたコンピュータによる一斉テストを受験せねばならず、普通シュタイナー学  
校では高等部にならなければ導入しないコンピュータの扱いを低学年から始めなければならないこと、そ  
の弊害からいかに子供をまもるかということです。ツアーの参加者からは宗教の取り扱いについての質問  
もでて、州の裁判でシュタイナー教育は宗教ではないとの認定を受けたこと、それでも神という言葉を使  
う詩や歌は省くようにしていることや季節のお祝いはするけれどクリスマスなど宗教行事は祝わないこと  
を聞きました。

サンフランシスコの学校は、牧歌的な田舎にあるメドフォードの学校と異なり、売春やドラッグが日常に  
入り込む貧困地帯にあり、学校に入ってすぐ気づくのは人種の多様さです。アフリカ系 12%、アジア系  
13%、ラテン系 61%、白人 9%、非英語圏の子ども 43%という構成で、教室や保護者の集う部屋には英  
語の下に、スペイン語、時に中国語が書かれています。同じシュタイナー教育の要素を取り入れた学校と  
はいえ、メドフォードの学校と比べると、芸術や手仕事、語りの時間などシュタイナー教育の特徴とい  
えるものはまだ整ってはいません。けれども家庭で困難な状況にあり、学習障害や情緒障害を抱えた子ども  
が数多いなか、創設者や校長を始め、先生たちが保護者たちと協力して子どもたちに何より必要な愛とケ  
アを提供し、安全と安心を与えつつ、学びを推進する姿は心打たれるものでした。私自身基本的にワー  
ーでの移動でしたが、昼間に歩いたときに身の危険を感じる場面もあり、学校が置かれている状況をま  
まごと体験しました。この学校には二日間行けたこともあって、朝の集まりで唱える短い詩を日本語で言  
うよう頼まれたり、授業に入って参観したり、保護者と話す機会もあったりで、私にとって一番心に  
残る訪問になりました。

